

日本防災士会 千葉北

第 34 号 2018 年 10 月 1 日発行

今号の内容

- 北海道地震体験記 1
- 避難所運営の基本を学ぶ 5
- 幼児からの防災教育の大切さ 6
- シリーズ「地区防災の推進」 8
一京成サンコーポ浦安自治会
- 北部支部会員さん紙上インタビュー
伴登義懿さん 11
岡田和也さん 12
- 会員短信 小椋養一さん 13
- 北部支部の防災支援活動 14
- 新会員紹介 15
- 編集後記 15

北海道地震体験記

～胆振東部地震～

藤田隆雄防災士

防災士会北海道支部の防災行事支援のため札幌市に滞在していた4名の防災士（敬称略、東京都支部：松井正雄、正谷絵美、北部支部：谷 正美、藤田隆雄）が9月6日未明に発生した胆振東部地震に遭遇しましたが全員無事に帰京しました。ここに藤田隆雄防災士の現地での

活動体験記を紹介します。

衝撃

9月6日（木）午前3時7分頃、札幌市内のホテルで就寝中、突然の激しい縦揺れで起こされました。その後長周期の揺れが10分間ほど続き大変長く感じられました。情報を得るためテレビのスイッチを入れましたが停電で起動せず、後の活動に備えて再度睡眠をとりました。非常用電源が作動し「ホテルに心配はありません」との館内放送が流れました。

活動開始

午前5時起床、防災士服に着替え7時にホテルのレストランで冷たい朝食。空港が閉鎖されていることを知りホテルに滞在延長を申し入れましたがあっさり断られました。藤田以下松井、正谷、谷の4名で厚真町に向かうことを決めレンタカーを求めましたがどの会社も停電で全ての業務を停止中でこの計画も挫折。そこで札幌市役所に行き危機管理課を訪ねましたが対応できる職員が居ないため、札幌駅近くの市立中央中学校体育

館に開設された避難所の支援活動を行うことにしました。

青木信夫、三浦美恵子両防災士は北海道支部の防災行事支援を終え発災前日の9月5日（水）に起震車で帰京の途についていました。

避難所支援活動に入る

午前10時頃避難所に入りました。市の職員2名（若い男女）が作業中で近隣住民（多くが学校に設置されたソーラパネル電源の利用が目的と思われる）と旅行者など約50名が体育館に入っていました。2人の他に職員はいませんでした。私達は受付の設置、通路の確保、立ち入り禁止区域やトイレなど必要な貼り紙の実施、定期的なアナウンスの実施など市職員を指導・アドバイスし円滑な避難所立ち上げ作業を行いました。断水中のトイレの汚物処理のやり方についても市職員に教え、備蓄倉庫から毛布を運び出し避難者に提供しました。谷防災士と藤田が避難所受付及び関連業務と指導を担当し、松井、正谷防災士が食料支給と照明を含めた職員の指導にあたりました。市の職員は夕方には4名に増員されましたが避難所運営の指導を事前に受けた職員はいませんでした。



藤田防災士が受付対応



通路を確保し
落ち着いて休息

避難者の多くが旅行者

避難者の多くが停電と断水のためにホテルを追い出された旅行者で外国人も多く、受付で毛布と備蓄のクラッカーを渡すと安堵する姿が非常に印象的でした。地元住民は多

くが自宅避難をしていたものと思われます。そのためか地元自治会などの防災関係者の姿は避難所には見られませんでした。学校関係者も校内にいましたが避難所運営にかかわることはありませんでした。受付用の避難者カードの事前用意が 20 枚ほどしかなく、職員が急遽追加したカードが 40 枚で避難者受け入れについての認識不足は否めませんでした。この避難所は 600 名の避難者を想定して計画されているとのことで実際の避難者数は午後 9 時の時点で 250 名を超えました。

夕闇が迫る

停電と断水が続きました。昼間でも薄暗い避難所がますます暗くなり避難者の不安を解消するためには照明が必要でしたが、備蓄ランタンは 1 個しかありませんでした。そこで松井、正谷防災士がコンビニでの買い出しで（約 1 時間待ちの行列）ツナ缶と食用油を購入し、空き缶ランタンを体育館の舞台上に並べて避難所を明るくし安堵感が生まれました。「その場にあるもので対応する」という松井防災士の日頃の持論の実践でした。

水の備蓄が無い

備蓄倉庫にアルファ米があることがわかりましたが肝心の水の備蓄がありません。食料担当の松井、正谷防災士が近くに開設された給水所でお湯を沸かし、避難者 250 人分の温かい食事を 3 回に分けて支給しました。

外国人への対応

避難者の中には中国、香港、韓国、東南アジアなどからの観光旅行者が多く含まれていました。その中で韓国人観光客グループ 20 名は 3 ヶ所の避難所で、外国人という理由で入所を断られようやくこの避難所に入れたとのことで大変喜んでいました。災害発生時には国籍を問わず平等に助けるのが当然のことなので信じられない話でした。旅行者や外国人は災害時弱者として温かい真心で受け入れるべきです。

正谷防災士が堪能な中国語、韓国語、英語を駆使しきめ細かに情報を提供し、相談に乗り要望を聞いてあげたことは避難者に大きな安心と勇気を与えました。

現場の判断を優先

避難者が 250 名を超えた午後 9 時過ぎ、私たちの避難所に札幌市の災害対策本部から以下の指示が入りました。

- ・旅行者は受け入れないように
- ・外国人は受け入れないように

私たちは派遣されている市の職員と協議し、当避難所では旅行者と外国人の受け入れを続行することを即座に決めました。旅行者や外国人を路頭に迷わすことは出来ません。

外国人の中には固く手を握り涙を流して感謝してくれる方もいました。そうした方々は日本を訪れる前よりもっと札幌と日本が好きになって帰国されたことと思います。良い人助けが出来たことに私達も嬉しい気持ちでした。災害現場では人を守るとの観点から現場の判断を優先すべきであると考えます。

午後 10 時頃に自宅の対応を済ませた防災士会北海道支部の横内事務局長が駆けつけ深夜まで懸命の支援をして下さいました。

被災状況視察

9 月 7 日（金）午前 7 時、横内事務局長の車で厚真町方面に向かいました。札幌市内は全て停電していましたが給油待ちの車の列が目立つ以外は特に異常は感じられませんでした。高速道路に乗り一路日高方面に向かいました。高速道路を降りると道路に段差があったり随所に地震の爪痕が見えました。苫東厚真発電所の煙突を見ながら厚真町、鵒川町を通過し日高町平賀の崖崩れ現場を確認。鵒川町では筋交いの無い家屋、ガラス窓の多い家屋、建て増し家屋など耐震性の弱い家屋が倒壊しているのを確認しました。

被災者から「2 階に寝ていて助かった」

「転倒した家具の隙間から這い出して助かった」などの話を聞くことができました。幸い死者は出なかったとのことでした。

その晩は札幌市内の銭湯で垢を流し、さっぱりした気持ちでゲストハウスで休みました。



鵒川町

帰京と感慨

9 月 8 日（土）午前、4 名全員が新千歳空港から帰京の途につきました。私は 10 時 30 分発の羽田行き便に搭乗でき午後 0 時 30 分無事羽田空港に到着し、激動の北海道支援活動を終了しました。

今回の地震発生地域は千島トラフに近く地震発生確率が 80%に引き上げられた場所であると理解していますが、避難所支援活動を通じて行政などの危機対応意識が不十分であったことを感じました。防災士服で活動する私たちに対して寄せられた被災者たち

の敬意と信頼を忘れることはできません。また千葉・東京から懸命にサポートして下さいました皆様に支えられての活動であったことも感謝の思いで心に刻んでいます

避難所運営の基本を学ぶ

～墨田区住民防災組織育成研修会より～

8月27日（月）すみだリバーサイドホールで開催され、NPO 法人日本防災士機構理事の橋本 茂氏が「避難所運営を見つめなおす～地域防災力日本一を目指して～」をテーマに講演を行いましたのでその要旨を紹介します。



- 絶対的な方法はないが絶対的な基本があるので今日は避難所運営の基本についてお話ししたい。
- 避難所で何が起こるかは過去の多くの事例でわかっているので平時において備えることが出来る。事前の準備の有無が被災時に明暗をはっきり分ける。災害発生以降も時系列的に何が起こるかは予測できるので先手で手を打つこと。
- 豪雨災害発生2週間後のある避難所を訪ね「今困っていることは？」と聞くと「弁当が足りないこと」との事。原因は「自宅避難の人やボランティアが弁当を持って行くため」との説明。ボランティアには弁当を出さないという基本が認識されていなかった。避難所運営委員会の設置有無を尋ねたところ「まだです。昨日初めて避難者代表の顔合わせができました」との返事。運営体制を作ることが最優先事項であることが認識されていなかった。
- 避難所の避難者数のピークは平均して開設3日目に来る。従って初日の時点で満杯にせず余裕スペースを50%は確保しておくこと。
- 避難所に来る順番は1)元気な人 2)少し大変な人 3)車椅子など大変な人、の順番である。先着順で無作為に入れると元気な人が一番良い場所を占める。従って最初に区割りを明確にして避難者の仕分けをすること。また立ち入り禁止区域は真っ先に貼り紙で明示すること。「立ち入り禁止」「トイレ」などの表示が必要になることはわかっているので事前に用意しておくこと。
- 避難所は避難住民の住居であり私的な空間であるからプライバシーを守るた

めにマスコミは入れてはならない。

- 間仕切りを完璧にやり過ぎると1人1人が孤立し精神衛生上良くない。交流しストレスを発散できる適切なコミュニティスペースを設けることが必要。
- 段ボールベッドはなぜ必要か？避難所では床上20センチ位までは常に塵埃が舞っており就寝中に吸い込み病気になる危険性が高い。また高齢者は床上から立ち上がることが困難なのでついトイレや動くのを我慢し健康を害する。ベッドがあると立つ労力が軽減出来る。(避難所では空き段ボール箱が多く出る。内部に筋交いを入れるだけでベッドとして必要な強度が得られる)
- 断水しトイレをバケツの水で流す場合、紙は絶対に流さずにボックスにためること。必ず詰まる。
- ペットは避難所で必ずもめる問題。居住スペースには絶対に入れてはならない。動物アレルギーの人が避難者の中に必ずいるので命にかかわる問題となる
- 高齢者と子供の同居は双方に大きなストレスとなる。高齢者は静かにしていたいが子供は運動して遊びたい。段ボールなどを利用してキッズルームなどを作ることで解消をはかることができる。
- 女性の視点が大事。避難所運営委員のメンバーに必ず女性を入れること。
- 壁新聞は情報伝達のために大事。放送だけでは伝わらないし残らない。
- 組織的な窃盗団が年々増加している。自警団は必須。夜間パトロールは毎日コースと時間を変えること。
- 避難所には地域住民だけでなく帰宅困難者、旅行者なども来る。またより快適で安全な避難所を求めて他地域の住民もやって来る。従って避難者数は目論見通りにはいかないことを知っておくこと。
- 避難所に指定されていなくても幹線道路に面した施設、安全そうな施設には避難民がやってくることを覚悟しておくこと。「避難所ではありませんから」と断ることは出来るが地域での信頼は損なわれる。
- 避難所での生活は苦痛以外の何物でもない。皆で我慢し分かち合うことである。
- 最も大切なことは柔軟な心と人間力である。マニュアル通りにやろうとしてもうまくゆかない。「あの人が言うのだから、そうしよう」と言われるような人間力のある人をリーダーに持つことが望まれる。

幼児からの防災教育の大切さ

ともすれば「小さな幼児への防災教育は難しいだろう」と考えがちですが二つの事例

を白川恵防災士のレポートから紹介します。

事例1

6月8日（金）東京都中央区の月島聖ルカ保育園において園児（4～5歳）を対象に防災学習が行われ、北部支部が BCN と共に協力しました。

学習内容は次のようなものでした。

- 防災ダックを使った「地震」「津波」「台風」「雷」への防災行動の学習
- 新聞スリッパ作成学習
- 起震車による地震体験



真剣に聞く



素直に行動

学習を通し幼稚園児について次のような発見がありました。

- 素直に吸収し素直に実行する能力は大人よりも優れている。
- 新聞スリッパ作りなどの手順学習についても優れた能力を発揮する。
- 体裁を気にしないで必要な時に声を出したり大胆に行動することが出来る。

事例2

3月3日（土）船橋市防災女性モニターの活動としてららぽーと東京ベイで行われた「防災スタンプラリー」に参加しました。親子での来場者が多いので親子で防災について考えてもらう企画として「家庭内 DIG」を紹介しました。「家庭内 DIG」は災害時の家庭内の危険個所について考えるものです。

一般的な家庭の部屋割と各部屋の家具配置などをわかりやすい大きな立体的なイラストで示し、そこにウサギの一家が仲良く暮らしている様子を漫画的に描き入れます。子供たちにその絵を与え「地震が起きたら危ないところを5つは見つけてね」と話すと一生懸命にさがし出すことに没頭し、その中で防災について親子の熱心な会話が生まれます。親しみやすいウサギのキャラクターを相手にゲーム感覚で家庭内の危険を考える面白さが反響を呼び、ブースには親子連れが途切れることなく訪れました。

地域防災といっても先ず家庭内の安全確保が第一歩であり、「家庭内 DIG」は子供た

ちと親が一緒になってわが家の防災について考え話し合う良い機会を提供すると思われます。そこでは危険について子供の視点からの色々な気づきもあります。

以上の二つの事例から幼児や子供への防災教育について次のことが指摘出来ます。

- 子供たち（幼児を含め）は大人が考える以上に吸収力、理解力、対応力を豊かに持っている。
- 吸収力豊かな子供の時代から自分の身を守る考えや術を身につけさせることが効果的である。



シリーズ「地区防災の推進」ー京成サンコーポ浦安

京成サンコーポ浦安は総戸数 410（全 16 棟）の 5 階建てマンションで独立した自治会組織を持っています。居住者の高齢化が進んでいますが若い世代の入居も少しずつあります。

2011 年の東日本大震災に際して自治会があまり機能できなかった反省を踏まえて同年に自治会の中に防災プロジェクトが作られました。防災プロジェクトの今日までの活動の歩みを紹介します。



- **組織の継続性と中心者の存在**

防災の継続性と一貫性が大事であるとの考えでプロジェクトメンバーの任期は 3 年とし、かつ再任を妨げないことにしました。北部支部の梅木 満防災士はプロジェクト発足時から現在まで中心メンバーの一人として活動しています。

- **成功例から学ぶ**

プロジェクトチームの活動を始めるに当たり、浦安市で自主防災活動が進んでいると思われる A 自治会のやり方を勉強することから始めました。そして A 自

治会が自分たちで地域防災マニュアルを作り活用していることに注目しました。

- **マニュアル作成は始めやすい**

浦安市で作られた市の地域防災計画には防災活動や防災発生時の対応が網羅され自治会や自主防災組織が取り組むべき事柄も述べられていますが、京成サンコーポ浦安自治会ではこれが効果的に活用されていないのが実情でした。プロジェクトチームは A 自治会のやり方を参考に市の地域防災計画を教本にしながら自分たちの地域にあてはめた防災マニュアルを作ることから活動を始めました。

- **欲張らずシンプルなもの**

月 2 回のプロジェクト会議を持ち約 2 年間をかけて「共助編」を完成させました。災害発生時には不特定多数の人が緊迫した中で参照することを前提に、ページ数は出来るだけ少なく、シンプルな図解を出来るだけ多くし、実用性を最も重視して作りました。毎年の防災訓練はこのマニュアルをもとに行い、実施後の反省点をマニュアル内容に反映し、より良いものにする努力を続けています。

- **マニュアルが活動の基盤に**

自前の防災マニュアルが出来たことにより以前のように外部に委託する防災訓練ではなく、目的を明確にした自主的な防災活動と定期訓練が出来るようになり、自治会員の防災意識も自然に高まりました。以前は自治会の防災体制について色々不安を持つ人もいましたが、自前の防災マニュアルを持ち計画的な防災活動が始まったことにより住民の中に安心感と信頼感が生まれていると梅木防災士は感じています。

- **共助への人の輪づくり**

防災プロジェクトチームは防災と共に自治会のお祭りの企画運営も担当しています。これは地域住民の日常の交流から生まれる“人の輪”が災害発生時に大きな力になるとの教訓に基づき、防災活動と住民の交流を一体で進めようと考えたためです。

- **組織はシンプルでわかりやすく**

災害発生時の対応は災害対応のための特別な組織を別に設けることはせず、自治会の既存の各組織単位であらかじめ決められた災害時の役務を分担して対応します。これによりコミュニケーションが取りやすくリーダーも明確で迅速な対応が出来ると考えています。

- **自治会間の連携**

京成サンコーポ浦安自治会は他の 4 自治会とともに浦安市富岡小学校区に所属しています。同小学校区の合同避難所運営訓練に参加した梅木防災士は各自治会間のコミュニケーションが不十分なこと、避難所運営マニュアルが学校中心に作られており住民の立場からの見直しが必要なこと、住民への周知が必要なことなどを感じました。そこで他の自治会に呼びかけてプロジェクトチームを作り避難所運営マニュアルを作ることを提案しました。多くの自治会が自宅避難を主に考えていたり、自分の団地のことで手一杯という状況で避難所運営に関わることは当初戸惑いがありましたが、梅木防災士の熱意でプロジェクトが動き出し約 3 カ月かけて避難所運営マニュアルを完成させました。

- **住民のための避難所マニュアルに**

完成したマニュアルを正式なものにするために学校関係者、浦安市防災課担当者、各自治会代表者による合同会議を持ち、マニュアルの作成経緯と内容を説明し審議を経て富岡小学校区の避難所運営マニュアルとして採用が決まりました。本年 9 月には本マニュアルに基づいて第 1 回の避難所運営訓練が行われました。

- **避難所開設は最初に来た人がやる**

このマニュアルの特徴のひとつは避難所に最初に駆けつけた人が誰でも避難所開設が出来るように、開設に必要な作業が手順を追って簡潔な読み上げ式に書かれていることです。マニュアルはミッションボックスに収納されて避難所に保管されています。マニュアル作成を通して富岡小学校区の 5 つの自治会の間に防災についての連帯感が生まれたことは今後のために大きな一歩であったと梅木防災士は感じています。

ここに紹介した事例では一人の防災士の問題意識から出発し、自分たちの安心・安全を守るためのマニュアルを皆で考え、皆で作成することから活動が始まっています。粘り強くその活動を進める中でマニュアルという目に見える成果物が生まれ、それが自信となり活動のルールとなって自主的な防災活動が着実に進められている様子が理解できます。



梅木防災士と防災倉庫

♪ 北部支部会員さん紙上インタビュー ♪

伴登義懿（ばんどう よしい）さん



Q. 出身地と自己紹介をお願いします。

A. 出身地は石川県津幡町で、金沢市の隣、北陸道沿いの町です。

Q. これまでのキャリア（お仕事など）を教えてください

A. 黒部ダムや御母衣ダム、名神高速道路等の大型社会資本整備が始まった頃で、土木工学関係の仕事をすべく、建設省(現国交省)に入省しました。最初の勤務先は四国徳島で、四国4県、東北(山形・庄内：月山ダム、福島・会津：大川ダム)、北陸(富山：河川・道路)、東京(宅地開発)、茨城(霞ヶ浦開発)等で勤務しました。以上のように防災に関する計画・設計が主な仕事でした。

Q. 特技、お持ちの資格、得意分野を教えてください。

A. 建設部門の技術士で、専門分野は「河川、砂防及び海岸・海洋部門」です。

Q. 防災士になったきっかけはなんですか？

A. 防災士資格取得は制度創設(平成15年 2003年)の2年後(平成17年9月 2005年)で65才の時でした。防災施設整備は必須ですがその効果に限界があり、自助・共助による減災が大切だと考えたからです。

Q. 地域や職場などで何か防災活動に取り組んでいますか？

A. マンション住まいで自治会(防災部会)もありますが、その役員は年度毎の輪番制ですので、これとは別に防災協力会があり、各階数人のメンバーで共助体制をとっています。昨年度発足した「船橋防災連絡会」で地域のために頑張りたいと思います。

Q. 2011年東日本大地震の時はどのような体験をされましたか？

A. 船橋市危機管理課(当時「防災課」)との打合せ後の帰路に地震に遭いました。マンション屋上の貯水タンクから水が飛出していました。翌日北部支部の数人と話し合い、取敢えずJR船橋駅前で募金活動を行いました。その後1年後の平成24年8月と3年後の26年6月に現地視察に出かけました。(支部会報第4、9、17号参照)

Q. 今、はまっていること、熱中していること、趣味などを教えてください。

A. 今は終活(故郷 石川県津幡市の家仕舞い)が最重要課題で、これに目途がついたら以前やっていた尺八(都山流)をやりたいなと思っています。

Q. 北部支部の活動に期待すること、取り組んでみたいこと、ご意見をお聞かせ下さい。

A. 人口減少、高齢化、社会資本老朽化の一方、自然災害を取巻く環境は次第に厳しくなっているように思います。この現実を如何に考え、どのように対応するか。

Q. 将来の夢をお聞かせ下さい。

A. 上記について先導的に考え、試行して、安全・安心社会の実現に貢献することです。

♪ 紙上インタビュー ♪

岡田和也（おかだ かずや）さん



Q. 出身地と自己紹介をお願いします。

A. 実家は京都府久美浜町（現京丹後市）です。京都のイメージとは全く異なる日本海側の町です。生育地は兵庫県尼崎市です。

Q. これまでのキャリア（お仕事など）を教えてください。

A. 総合リース会社で営業（工作機械メーカーに出向）、業務総務部門を担当。現在はリース満了物件（特に工作機械）のリユース事業に携わっています。

Q. 特技、お持ちの資格、得意分野を教えてください。

A. 船橋市消防局応急手当指導員として救命指導をしています。東京消防庁同普及員、赤十字救急法救急員です。防災関係では防災介助士、甲種防火管理者。仕事上では玉掛資格、天井クレーンとフォークリフト運転資格を持っています。

Q. 防災士になったきっかけはなんですか？

A. 京都市内で阪神淡路大震災を体験したことです。神戸市長田区と西区、西宮市に親戚がおり長田区の伯母の家が罹災（家屋倒壊、その後類焼）し、姪が亡くなりました。避難先に向かえたのは発災2週間後。バイクで半日掛かりでした。本社への異動を機に赤十字千葉県支部の防災ボランティアになりました。防災士資格は日赤経由で取得しました。

Q. 2011年東日本大地震の時はどのような体験をされましたか？

A. 品川区の本社6階で執務中でした。隅田川、荒川、江戸川と大きな川を渡らなければならないため徒歩での帰宅は断念。会社に泊まることを決めインターネットで刻々と入る情報をチェックしながら不安な一夜を過ごしました。

Q. 今、はまっていること、熱中していること、趣味などを教えてください。

A. バイクツーリングです。房総（暴走はしません）半島の海や田園風景、海の幸を楽しんでいます。

Q. 北部支部の活動に期待すること、取り組んでみたいこと、ご意見をお聞かせ下さい。

A. 各種実技、DIG・HUG・避難所運営等のスキルを北部支部で身につけて地域の方々に啓蒙し、夫々の実情や地域にあった備えと防災行動が出来るよう「気づき」の種を蒔いていきたいと思っています。

Q. 将来の夢をお聞かせ下さい。

A. 「ありがとう」と言われる仕事や活動をしたいと思っています。そのために防災士や応急手当指導員のボランティア活動に時間の許す限り参加したいと思っています。



～会員短信～

火災被災者援助で活躍 小椋養一防災士

野田市の小椋養一防災士は9月11日（火）午後11時過ぎに起きた近隣のアパート火災で、被災者の援助活動に大きな働きをしました。8世帯9名が暮らすアパートが全焼し、死亡1名、火傷で緊急搬送1名、7世帯8名が焼け出された今回の火災事故で小椋防災士が行った活動は以下の通りです。



9月11日（火）

- 全員の安否と氏名の確認（被災者をブルーシート上に退避させて確認）
- 市の保健福祉部生活支援課に緊急対応を要請（担当職員の派遣など）
- 自治会の会館に一時避難所を開設
- 生活支援課より毛布の支給を受け被災者全員の宿泊を実施

9月12日（水）

- 被災者に朝食（おにぎりとお茶）を自治会費で支給
- 市の生活支援課に昼食（災害時用食品）支給を依頼
- 社会福祉協議会を通し日本赤十字（野田支部）に避難用備蓄品支給を依頼
- 地元民生委員に連絡し今夜からの仮住居について支援を依頼
- 野田市の市営住宅への全員の入居が決定
- 仮住居への入居準備完了が確認でき被災者全員が市営住宅に移動

小椋防災士は長く地域の役員をつとめながら積極的に防災活動にたずさわり、行政や関係諸機関と密接な関係を築いて来ました。そのことが迅速かつ的確な今回の援助活動を可能にしたと思われます。9月13日には関係諸機関と被災者の皆様から小椋防災士に心からの謝意が届けられました。



～北部支部の防災支援活動(2018年6月～8月)～

北部支部は以下の防災行事に参加協力しました。

ご協力大変にありがとうございました。

- 6月1日(金) 文京区立第八中学校防災宿泊体験・講演(東京都文京区)
- 6月2日(土) 市原市土砂災害避難訓練
- 6月3日(日) いすみ市土砂災害避難訓練
- 6月4日(月) 習志野市立実籾小学校防災学習
- 6月5日(火) みはま成田クリニック地震体験(成田市)
- 6月8日(金) 月島聖ルカ保育園防災学習(東京都中央区)
- 6月14日(木) 習志野市立実籾小学校地域防災探索その1
- 6月16日(土) 千葉災害ボランティア連絡会 HUG 学習(千葉市)
- 6月22日(金) 習志野市立実籾小学校地域防災探索その2
- 6月24日(日) 印西市小林牧の里中防災会防災懇話会
- 6月30日(土) 佐倉市まちづくり協議会・青菅小学校防災講話
- 7月1日(日) 岩名第五区自治会防災訓練(野田市)
- 7月8日(日) パールタウン自主防災会防災講話(茨城県古河市)
- 7月9日(月) 習志野市立実籾小学校防災マップアドバイス
- 7月10日(火) 若松小中学校・船橋市浜町公民館救命講習(船橋市)
- 7月14日(土) 小金原四丁目町会防災訓練(松戸市)
- 7月15日(日) 習志野きらっと2018(習志野市)
- 7月24日(火) 東京学芸大学附属大泉小学校防災講演(東京都練馬区)
- 8月24日(金) いすみ市避難所運営訓練(HUG)
- 8月26日(日) 大久保小学校区自主防災組織連絡会防災リーダー訓練(習志野市)



～新会員の紹介～

2018 年 6 月以降、以下の方々が北部支部の会員になりました。
北部支部の会員数は 119 名です。(2018 年 9 月 7 日現在)

泉川洋二さん（鎌ヶ谷市）	白濱久子さん（松戸市）
吉野隆志さん（館山市）	池上順子さん（袖ヶ浦市）
清水晴一さん（習志野市）	吉村辰久さん（市川市）
山形裕紀さん（野田市）	石川浩美さん（館山市）
丸 麻衣さん（船橋市）	椎名光恵さん（市川市）
大木雅人さん（船橋市）	小笠原順さん（野田市）

編集後記

秋の涼気がほっとさせます。

今月号では防災士の皆さんが災害発生に遭遇し、日頃鍛えたスキルを遺憾なく発揮して見事な活躍をした体験を紹介しています。共通しているのはいざという時に迷いなく勇気をもって直ちに行動したことです。人としての真価が問われる場面です。大いに参考にし励みにしたいと思います。

北部支部は明年発足 10 周年を迎えます。それをマイルストーンとして更に高いステージに進めるよう会報も発信を続けてゆきたいと思います。

広報担当：茂木 宏 飯岡 孝 中村あや子
事務局の連絡先：竹内哲志（takeuchi.srmmp@nifty.com）
広報担当の連絡先：koho.chibakita.bousaisi@gmail.com

